私にとっての豪雪協
—積雪地帯区分と人工林の成林限界—

前田 雄一（元鳥取県林業試験場）※

鳥取県林試を退職と同時に豪雪協を離れて6年が経ちました。試験研究に携わってから、ずっと豪雪協に関わってきたので、今でも「離れた」という感覚は無いですね。研究員になったのが34歳。県庁で温泉の許認可業務をしていましたが性に合わず、林試に異動させてもらいました。造園職なので林業も研究室も知らない。無謀な状態で豪雪協と出会ったわけです。

1983年当時の豪雪協は15県が参加。上司が取ってきた雪関係の国補事業（スギ人工林の雪害対策）を担当した縁で、鳥取県は京都府と共に入会しました。新米研究員が足を踏み入れた豪雪協でのカルチャーショックは、一匹狼の世界であること、「どれだけ雪とスギに関わってきたんや！！」という人たちの集まりだったことの2点です。豪雪協の第一世代・・・雪の事なら何でもお見通しでした。そして、彼らの代から発刊している機関誌「雪と造林」は、雪国の研究員の心意気を如実に表していました。その第一世代の人たちが、蓄積した知見をもとに「雪に強い森林の育て方」という実践的な本を1984年に上梓しました。地方林試は調査地が身近にあるので、国立の研究機関よりもきめ細かな観察ができます。その強みを活かした地方林試の面目躍如といった内容でした。

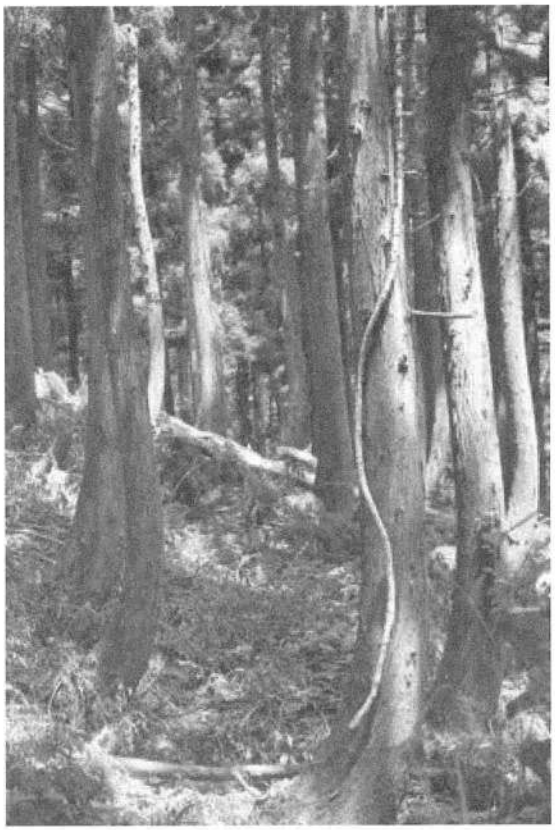
この第一世代が本を上梓したあたりから林野庁は「雪とスギ」に限定した国補の課題づくりに窮してきたようです。国が進める課題には広葉樹が絡むようになりました。積雪地帯区分とスギ不成績造林地の実態、そして不成績地に混入する広葉樹の研究です。これらの課題によって、豪雪協の雰囲気はガラッと変わりました。広葉樹に違和感を持たない第二世代の登場です。彼らは私よりも年下だけれど、研究員としては先輩です。話しやすいので色々と教えを乞うたことを覚えています。雪という同じ環境に位置する各地に相談相手がいるということは心強いことです。

日本海側に位置する鳥取県は、他県の研究員に教えてもらったとおり、海に近い山と海から遠い山では、同じ標高でも最深積雪深が随分と違うことが分かりました。面白い話があります。300年以上の歴史を持つ智頭林業地は、比較的積雪の少ない内陸部に位置しています。智頭林業は伝統的に雪起こし、枝打ちなど、丁寧な手入れをすることで有名です。この智頭の林業家が、海に近い県内随一の豪雪地帯にある山林を購入してスギを植林しました。立派なスギ林（写真－1）にする自信はあったそうです。しかしながら、何年経っても終わらない雪起こし作業に疲れ果て、匙を投げてしまいました（写真－2）。施業の良し悪しが発揮できるのは少雪地帯に限ります。そして豪雪地帯には植林するものではないな、ということを教えてくれた現場となりました。このことは、積雪地帯区分を推進する上での励みとなりました。

また、積雪断面を観察するため、冬に開催された新潟県での担当者会議では貴重な体験をしました（写真－3）。積雪断面のある若い広葉樹二次林に辿り着くと、広葉樹の雪上木にテープが巻かれています。担当者の話では時々、現地に行っては雪上木の幹にテープを巻き、雪解けまで観察するとのこ

とでした。その結果、雪上木は雪に強いブナばかりで、他の高木性樹種は積雪の下で斜立、倒伏していることが分かったそうです。太平洋側と日本海側ではブナ林の様子が違い、太平洋側ではイヌブナ、ヒメシャラなど多くの他樹種を交えるが、日本海側はブナの純林になることが知られています。それを裏付ける面白い研究をしているなあ、と感心しました。こういうデータ取りなら楽しいので、積雪の中でも苦にならない。出口を考え、ストーリーを組み立て、面白がって行動することの大切さを教えて貰いました。このような経験を積みながら、広葉樹絡みの国補課題が3つ終わった頃、第二世代の人たちが中心となって「雪国の森づくり」を上梓しました（2000 年）。この課題で行った積雪地帯区分、スギの適地適木、成林限界、スギ不成績地に混入する広葉樹の実態、広葉樹を活かした林分改良方法の提示等々、会員の研究報告や学会発表などのデータによって構成されたもので、1 冊目と同様に雪国の研究員が地道に集積した知見を盛り込んだ価値ある本だと思います。表現や構成にこそ世代の違いはありましたが、「伝統は生きているな」との印象を強く受けました。

写真－１．智頭林業地の美林
（標高 600m、最深積雪深の推定平年値 100cm）



写真－２．扇ノ山山系のスギ林
（標高 600m、最深積雪深の推定平年値 200cm。
所々スギが消失し、残ったスギの形質も悪い）

その後、国の補助金が豪雪協絡みでは取れない仕組みになったことから、参加県が少しずつ減っていきました。その頃に私は退職しました。現在の参加県は7県とか・・・。雪という共通の課題に真摯に取り組もうという豪雪協発足当時の熱い思いの県が残ったのですかね。ただ、昨今の林業情勢は

育林から木材利用の時代に変わってきたので、育林的な研究に拘ると厳しい面があるように思います。搬出とか、作業道とかの利用関係も絡めた研究が必要になってきているのでしょうか。日本海側は海と山との距離が短いなど地形的な特徴を持っています。また、雪の無い地域とは、同じ植物でも葉の大きさが違ったり、垂直分布に違いがあったりします。今後、植物生理などの面からも豪雪協ならではの話題が出てくるかもしれません。地方林試の研究部会は関東や関西ブロック等に分かれますが、「同じ環境の雪国ブロックというのがあってもいいよな！！」と思います。豪雪協には、他の部会にはない「雪と造林」という機関誌があります。確か、森林総研の図書リストへは正式に認めてもらったという記憶があります。思い切ったことが書ける場があるということはありがたいことです。数年前、関西の育林部会の席上で森林総研の先生が「豪雪協は各部会の中でも別格だ」と発言されたそうです。今後も、豪雪協が地方林試の雄として地に足の着いた研究活動をされることを願っています。

最後になりますが、私は退職後に樹木医学会へ入り、面白そうな事象があるとデータを取って発表するようにしています。あまり経費のかからない健全な趣味だと考えました。これも、豪雪協との出会いのおかげだと感謝しています。冒頭で述べた豪雪協と「離れた」という感覚が無いという事は、こういうことです。また、どこかでお会いできることがあるかもしれません。気軽に声をかけてください。

写真－３．1994 年 3 月、新潟県で開催された担当者会議
（ブナ二次林内で積雪断面の観察中）

※著者近況
鳥取県（林業試験場森林管理室長）を退職後、「前田森林植生研究所」を開いて、植生調査や森林教育に携わっている。森林インストラクターと樹木医の資格を取得。現在鳥取市に在住。